

# The Location Around The World

行ってみたいな名作の舞台へ…



volume 5 (Paris/Cannes/Verona/other locations)

CHIHIDE MATSUMURA



■シャンゼリゼのクリスマス・イルミネーションは宝石のよう

## 数々の映画の舞台にもなった 19世紀デカダンの象徴「ムーラン・ルージュ」

②0 パリ・モンマルトル(フランス)

「アメリ」のロケ地に引き続き、パリのモンマルトルの丘をそぞろ歩いてみよう。アメリの働いていた「Cafe des 2 Moulins」のすぐそばに君臨するのが、赤い風車で有名なキャバレー「ムーラン・ルージュ」。そう、言わずと知れたニコール・キッドマン、ユアン・マクレガー主演のミュージカル映画「ムーラン・ルージュ!」(2001)の舞台となったところだ。

19世紀、デカダンの薫り漂うパリ。ムーラン・ルージュのトップスター、サティーンと貧しい作家の恋物語を「ロミオ&ジュリエット」のバズ・ラーマン監督が豪華絢爛に描いたミュージカル。でも私や、ただただニコール・キッドマンの美貌だけが残っただけという感が強い。それよりも知る人は少ないだろうが1952年にジョン・ヒューストン監督が世に出した「ムーラン・ルージュ」の方が好みかも。画家として初めて生存中にルーブルにその作品が飾られたという天才画家、アンリ・トゥールース・ロートレックの苦悩に満ちた人生を描いた作品。彼の出世作でもある「ムーラン・ルージュのポスター」のエピソードや彼の人生の苦悩、絵画への情熱の秘密を垣間見ることのできる興味深いストーリーで、バズ・ラーマン版とは対照的だ。頹廢的で、虚無的で、耽美的…まさにあの時代を主演のホセ・ファーラーが見事に演じきっている。そしてその象徴的な舞台がモンマルトルのムーラン・ルージュだったわけだ。残念ながら中に入って、あの有名なフレンチ・カンカンをこの目で見たことはないが、今もパリを訪れる観光客の夜のトップ・ディスティネーションだろう。

現在のモンマルトルはそれほど猥雑でもなく、どちらかといえばお洒落に感じるのは私だけだろうか。丘を上っていくとレストランだろうか、シックなムーラン(風車)を見つけた。ESPRIT(エスプリ)という言葉がフランス語にあるが、日本語に訳すと「粋」。モンマルトルの古びたビストロでワインを飲んでいると、そんな空気感を感じてしまう。決して高級ではないんだけど、知的というか芸術的というか、言葉では説明しにくい薫り…。これこそロートレックが愛した空気なのかも知れない…と勝手に思っているのです。





■夜の帳がおりると、それなりの妖しい雰囲気は漂う



■ちょっとシックなムーラン(風車)はレストラン



■こんな坂道のカフェも大賑わいのモンマルトルエリア



■いつだって工事中のポン・ヌフ

## パリ文化の懐の深さを感じる「ポン・ヌフの恋人」

①パリ・サンジェルマン・デ・プレ(フランス)

パリの起源は紀元前250年にも遡り、ケルトのパリジイ族がセーヌ川のシテ島に集落を作ったことに始まると言われている。その西岸にかかる橋が「ポン・ヌフ」、日本語に訳すと「新橋」だが、現存するパリの橋の中では最古の石橋。この橋が舞台となった映画が「ポンヌフの恋人」(1992)。フランスの奇才レオス・カラックス監督がホームレス同然の大道芸人アレックスと不治の眼病で人生に絶望したミシエルの鮮烈な愛を描いた異色の作品だ。コダーイの無伴奏チェロソナタでおもむろに始まる冒頭のシーンから何故か引き込まれ、見終わった後の感動というか重さが妙に脳裏に残っている。公開当時は賛否両論があったが、単館映画としては記録的にヒットした作品だ。当時も映画の設定通り橋の修復中で、カラックス監督は、何と寸分違わない橋をセットで再現して撮影したという。現在も2004年から2007年まで、当時ほど大がかりではないがまたもや修復中で、いつ行っても工事中だな…という印象がある。とはいえ、今は通行には支障がないけれど。

実際にロケが行われたのではないが、アレックスがねぐらにしていた橋の凹み(?)やセーヌの流れは映画のまま。ここに来ると妙に「人間」とか「愛」とかの深淵を考えると、やはりこの映画のせいかも。でも普通に歩くとセーヌにかかる洒落た橋であり、その界限はノートルダム寺院やサンジェルマン・デ・プレ教会、リュクサンブール宮殿などが建ち並ぶ観光名所だ。もちろん映画のようなエキセントリックというかシュールというか、あの独特な雰囲気はない。ソルボンヌ大学も近く、アカデミックなムードも漂っている。週末ともなると橋のたもとでは、画学生たちが絵を並べ、街ゆく人が品定めをしながら散歩を楽しんでいる。大阪の中之島もシテ島に似ていると言われることがあるが、やっぱりどこか文化の薫りでは負けていると感じるのは私だけか。

ともあれ、ポン・ヌフの橋の上で、パリ文化の懐の深さを実感して欲しい。



■ボーン・アイデンティティでも出てきた橋の上



■橋のたもとの絵画売り



■サルトルなど文化人が集った「ドゥ・マゴ」はすぐ近く

# 訳のわからんハチャメチャさが楽しい ルイ・マル監督の「地下鉄のザジ」

④6パリ(フランス)

フランス映画で筆者が好きなのが「ダ・ヴィンチ・コード」にも出演したオドレイ・トウの出世作「アメリ」。そのアメリのキャラクターが、いつも古いフランス映画の主人公とダブってしまう。それが「ザジ」。ルイ・マル監督が1960年に発表したドタバタ喜劇「地下鉄のザジ」の主人公だ。

物語はフランスの田舎からパリにやってきた10歳の少女ザジの、ハチャメチャな2日間を描いたシュールでとりとめもない物語なのだが、どこか「アメリ」に通ずる妙な可愛さを感じてしまう。彼女が列車でパリに到着し、ガブリエルおじさんに出会うのが東駅(Gare de l'Est)。最近では構内に洒落た売店などができたが、プラットフォームなどは昔のままのようだ。

そして題名にもある、彼女がパリに来てどうしても乗りたかったのが、地下鉄メトロ。でも筆者はあいにくスト真っ最中で車内は撮影できなかった。フランス、イタリアでいつも困るのがこの交通機関のストライキ。飛行機であろうが国営鉄道であろうが、本当にストの多いお国柄だ。映画のザジもご多分にもれず、乗りたかった地下鉄の入口はクローズド。仕方がなく、おじさんと一緒にタクシーで出発進行!

そこからのストーリーはあってないようなもの。自由奔放にパリ中を駆け巡るザジと、彼女を追いかけるガブリエルおじさんや、怪しげな中年警察官(?)。筋書きを追いかけるというより、パリを舞台にしたコミカルな映像コラージュを楽しむ感じで見たほうが面白い。パリの風景に欠かせないエッフェル塔やサン・ヴァンサン・ポール教会などが出てくる。筆者がパリらしい雰囲気のあるロケ地としてオススメするのは、ザジが酒場の主人や怪しい中年警察官に追いかけて逃げ惑うパッサージュ・デュ・グラン・セールやギャルリー・ヴィヴィエンスなどのクラシカルなアーケード。18世紀末頃から雨でもショッピング出来るということで人気になり、パレ・ロワイアルやアドレーヌ寺院周辺に多く作られたそうだ。中でも怪しい中年警察官に追いかけるシーンで出てくるギャルリー・ヴィヴィエンスはパリで最も美しいパッサージュとされているそうだ。日本の商店街とは天と地ほどの違いがあるほど伝統的で美しい。

観終わった後に、どう感じられるかは極端に差があるだろう作品だが、これがあのサスペンスの名作「死刑台のエレベーター」の監督が撮った映画だとは、ただただ驚くばかり。でも、何年経ってもそれぞれのシーンが妙に印象的に脳裏から離れないのは、天才監督のなせる技なのかも知れない。





■メトロの入リ口もアートっぽい



■ガジが田舎から到着したプラットフォーム



■ガブリエルおじさんと出会うパリ東駅



# ヌーベルバーグの秀逸サスペンス 「死刑台のエレベーター」の舞台としてのパリ

④7)パリ(フランス)

ハチャメチャ・コメディ作品「地下鉄のザジ」の監督が、同じくパリを舞台に撮ったとは思えないサスペンスの名作に「死刑台のエレベーター」がある。その監督の名は、ヌーベルバーグの旗手ルイ・マル。1957年に彼のデビュー作として世に送り出されたのがこの作品だ。クールなマイルス・デイビスのトランペットが、モノクロームの世界に限りなく深みのある心理的色合いを見せてくれる…50年以上経った今観ても、まったく遜色なく素晴らしい!

物語はカララ商会社長夫人の不倫相手である社員ジュリアン(モーリス・ロネ)が、社長を巧く殺し、完全犯罪の目前まで来ていたが、バルコニーに忘れたロープに気づき、それを回収するために再び会社に戻る。そして社のエレベーターに閉じ込められてしまう…。その現場、カララ商会になっていたのが、ブルバード・オスマン157番地の角にあるビルで、改修はされているが撮影現場である最上階辺りは当時の面影を残している。

そんなジュリアンを探して、ジャンヌ・モロー演じるフロランスが夜のパリを彷徨うのだが、このシーンは撮影用照明を一切使わず現場の地明かりだけで撮影したと当時話題になったそうだ。

そしてジュリアンのクルマを盗んだチンピラ少年と花屋の恋人が、ついには別の殺人を犯してしまうのだが、殺したドイツ人から奪ったメルセデスのスポーツカーを彼らが乗り捨てるのがエッフェル塔の近くにあるビル・アケム橋だ。ここは「地下鉄のザジ」でも登場したし、特に有名な「ラスト・タンゴ・イン・パリ」のアパルトマンはこの橋のたもとだ。そこから地下鉄で2駅ほど東に行ったらところには、チンピラ少年と花屋の恋人が自殺をし損ねたアパルトマンもそのまま残っている。

こんな風に歴史保存建築物でもなんでもない50年以上も前の建物がほとんどそのまま残っている…というか、残しているパリをはじめヨーロッパの人々の精神には本当に頭がさがる。東京や大阪を見てください。六本木ヒルズ?東京ミッドタウン?大阪うめきた??都市として本当にパリやロンドン、NYに匹敵するような魅力を感じられるだろうか?いつも首をかき上げてしまう筆者なのです。



■カララ商会があったビル



■様々な作品に登場するビル・アケム橋はエッフェル塔の近くにある



■花屋の恋人が住んでいたアパートマン



■地明かりの街角。筆者も泊まったホテル・レジーナ前



■ビル・アケム橋のたもとには「ラスト・タンゴ・イン・パリ」のアパルトマンが

# ゴダールの斬新さが活きる「勝手にしやがれ」 シャンゼリゼを中心に50年前のパリが舞台

④8 パリ(フランス)

ルイ・マル監督と並びフランス映画ヌーベルバーグを牽引したのが、ジャン・リュック・ゴダール監督。彼の出世作といえは言わずと知れた「勝手にしやがれ(原題: À bout de souffle)」(1959)。直訳では「息切れ、力尽きて」という意味なので、アメリカでは「Breathless」と訳されて発表されたが、「勝手にしやがれ」は当時の翻訳家、泰早穂子氏が名付け親で、その感覚は「見事!」の一言だ!!

さて、物語はジャン・ポール・ベルモンド演ずるチンピラ自動車泥棒ミシェルとジーン・セバーグ演ずるアメリカ人留学生パトリシアの会話を中心に、ミシエルの破天荒な生き方の最期を追った、いわばどうって事ないストーリー。(色合いはだいぶ違うが「地下鉄のザジ」も同じかも)ただ当時は、ハリウッド映画全盛の時代の中で、即興演出や脈絡の無いジャンプカットなど、映画制作の常識を覆すような斬新な手法が試されており、それが世界的に評価された代表的な作品。映画制作そのものが「勝手にしやがった…」と言っても過言ではないかも。好き嫌いがハッキリ分かれるが、映画が好きな人は、一度は観ておいて欲しい作品だ。

ロケ地としては冒頭のマルセイユの港から始まり、基本的にパリ市内、なかでもシャンゼリゼ通りがよく出てくる。50年以上も前のシャンゼリゼは今ほど歩道が広くなく、大阪の御堂筋のように側道に自動車が走っていたようだ。今も昔も、昼夜問わずいつでも多くの人で賑わっている。パトリシアが警官に尾行されて逃げこむ映画館、シネマ・マクマホンは凱旋門からすぐのマクマホン通りに今も健在。「ただでかけられる電話が12もある…」とミシェルが言うクリスチャン・ディオールのブティックはブランド店が軒を連ねるアベニュー・モンテーニュの中程にある。そしてシャンゼリゼをさらに下ると、ミシェルが思わず「美しい…」とため息を漏らすコンコルド広場に出る。このシーンも「死刑台のエレベーター」の章で書いたが、当時ヌーベルバーグで流行っていた地明かりのみで撮影されたという。凱旋門とエッフェル塔がライトアップしている時間が最高に美しい。そして、クリスマス時期にはさらにきらびやかにイルミネーションが輝いでテーマパークのようだ。

そしてクライマックス・シーンはモンパルナスの裏通り、カンパーニュ・ブルミエールで警官に撃たれ、逃げようとするが、ラスパイユ通りに入る直前で原題通り、「息、絶える」。



■地明かりで撮影したコンコルド広場



■クリスマスシーズンのシャンゼリゼは、まるでテーマパーク



■シネ・マクマホンは今も健在

■ラスパイコ通りに入る直前、息絶える



■パリでの夕食はルーブル近くの「Cochon」が安くて美味しい



■シャンゼリゼのクリスマスマーケットは知り合いドイツ人の弟がやってるそう



■Cochonのオニオンスープはバツグン



■屋間のシャンゼリゼもいつも賑やか

## ミラノ、ヴェネチアからぶらりと1時間半 「ロミオとジュリエット」の舞台ヴェローナ

③0ヴェローナ(イタリア)

以前、シェイクスピアの生まれたストラスフォード・アポン・エイヴォンを前回ご紹介したが、彼の偉大なる作品群のなかで、誰もが馴染み深い作品と言えばやはり「ロミオとジュリエット」ではなかろうか。演劇、バレエ、オペラからテレビドラマまで様々なジャンルで、今でも演じ続けられている名作。映画にもいくつか作品があるが、やはりフランコ・ゼフィレッリ監督、オリビア・ハッセー、レナード・ホワイティング主演版(1968年)が人気がある。

その悲劇の舞台、ヴェローナはイタリア北部、ミラノとヴェネチアのちょうど真ん中。そしてローマとドイツを結ぶ線との交差点に位置することで、古代ローマ時代から栄えてきた。12世紀に都市国家になり、13世紀・14世紀にスカラ家の元に全盛期を迎えた。その頃に実際にあった物語をもとにシェイクスピアが完成させたのが「ロミオとジュリエット」だ。しかしシェイクスピアは、一度もヴェローナには訪れたことはなかったのだとか。

ヴェローナ駅からバスに乗ってブラ広場まで来ると、まず巨大なアリーナに目を奪われる。ローマのコロッセオよりは少し小さいが、イタリアで最も保存状態が良いと言われており、座席まで残っているから凄い。そこからブランド・ショップが並ぶマツツィーニ通りを抜けると、ひときわ人だかりしている場所が、ジュリエットの家だ。本当にここがジュリエットの家だったか…は、よくわからないが、モデルとなったカプレティ家の邸宅であったことは事実。ジュリエットがロミオを待ち焦がれたという?テラスでは、女性たちは競ってそこに立って記念写真をパチリ。中庭にはジュリエットの銅像があり、その胸をさすると幸せになれるとかで、すっかりその部分だけツルツルになっている。ローマの真実の口といいトレビの泉といい、イタリア人はそんなことが好きなのだろうか。

ジュリエットの家から5分ほど歩いたところには、ロミオの家もあるがここは見学できない。そして少し離れたところには、ジュリエットの墓まである。蓋を開けた棺桶の中は空っぽなのだが、ちょっとここまで来ると、ロマンティックなムードとはちょっと違うかな?と思ったり…。とはいえ、本当に多くの観光客が世界中からやってきて、様々な言葉が街中で飛び交っている。「ロミオとジュリエット」だけで、これだけの人を集める求心力はなかなかのもの。シェイクスピアさまさまと言ったところだ。





■ジュリエットのテラスはいつも人気



■ジュリエットの墓…?



■アリーナ界隈は賑やか

## 開催中のカンヌ映画祭。その舞台は、 ゴージャスとフランクさが同居するリゾート

④カンヌ(フランス)

今回は名作の舞台ではないが、ちょうど開催中の第58回カンヌ国際映画祭の開催地、フランスのカンヌをご紹介します。ヴェネチア国際映画祭、ベルリン国際映画祭と並ぶ世界の三大映画祭のひとつであり、政治的圧力や商業性に影響されない映画祭として、映画制作者にとっても注目度の高いフェスティバル。日本人の受賞も歴史的に数多く、1954年「地獄門(衣笠貞之助監督)」、1980年「影武者(黒澤明監督)」、1983年「楳山節考(今村昌平監督)」のグランプリ、1997年「うなぎ(今村昌平監督)」のパルムドール受賞(1989年以前はグランプリが最高賞で、以降はパルムドールが最高賞)、昨年は主演男優賞に「誰も知らない(是枝裕和監督)」出演の柳楽優弥が14歳でカンヌ映画祭史上最年少受賞したことも記憶に新しい。

世界第一級のリゾート、コート・ダ・ジュールに位置し、ニースやモナコからもクルマで1時間以内。ビーチ沿いにはゴージャスなホテルが軒を連ね、映画祭開催中には世界中から映画関係者やセレブリティがやってきて華やかなイメージで街中が賑わう。

さぞかしゴージャスでエクスクルーシブ(排他的)な街なんだろう…と思ってしまうが、普段のカンヌは意外と静かでフレンドリーな街だ。南仏特有のオープンで陽気な人柄と、地中海で捕れる新鮮なシーフード料理がうれしい。街全体も「いかにも観光地!」然とした、わざとらしさがないので、ゆったりとしたリゾート気分が堪能できる。

カモメが空を泳ぐ朝焼けや夕暮れの海岸沿いを、大切な人とゆっくり散歩すれば、ほんとうに最高の気分になれる。パリの三つ星レストランのディナーやブランドショッピングでも味わえなかった「本物の贅沢な時間って、これだあ!」って、きっと感じることを請け合い。お試しあれ。





■映画祭準備の真っ最中



■映画関係者が多くとまるホテル・マルチネス



■リチャード・ギアの手形発見



■さり気なく出されたトマトがメチャ美味かった!



■やっぱスイートは最上階で気持ちいい



■ニースってどんなに排他的かと思ったけど、パリより格段フランク

■地元の方は気さくでいい感じ

# non-published locations

掲載を果たせなかった写真たち…



■ネロ少年が昇天する教会(アントワープ/ベルギー)

このような企画を続けていくには当然ながら、海外の映画ロケ地に足繁く取材・撮影に訪れる必要がある。しかしTV番組の『世界の車窓から』みたいに、世界あちこちに飛び回る予算があるわけではなく…種を明かせば、自らがプロデュースした「OSAKA光のルネサンス」のThe World Linking Tree from NORWAYの打合せに年4~5回はノルウェードローバックに打合せに行かなくてはならず、毎回、とんぼ帰りではもったいないので、帰りにどこかの都市に立寄って取材・撮影してくるパターンだった。(とは言え欧州だけでは企画として不完全なので、NYやLA、サンフランシスコなどはポケットマネーで出かけて行ったが)

なので、何ヶ月も前から撮り溜めしてあったが、2009年夏に企画が終了したことで、撮影したけど執筆・掲載することができなかったロケ地がいくつか残ってしまった。それらと、当時の海外旅行の思い出などをピックアップしてみた。



■アンネ・フランクの隠れ家からの景色(アムステルダム/オランダ)



■ベルギーならブルージュが最高(ベルギー)



■何度でも行きたい街だ(ブルージュ/ベルギー)



■ベルギーは何を食べても美味しい(ブリュッセル/ベルギー)



■ゴンドラが移動手段の街(ヴェネツィア/イタリア)



■「旅情」「観光」等で登場するヴェネツィア・サンタ・ルーチア駅(イタリア)



■「インディージョーンズ-最後の聖戦-」に登場するサン・バルナバ教会(ヴェネツィア/イタリア)



■サン・マルコ広場は数々の映画に登場する(ヴェネツィア/イタリア)



■ヴェネツィアと言えば仮面舞踏会(イタリア)



■ドゥカーレ宮殿前の親子(ヴェネツィア/イタリア)



■「恋するバルセロナ」に登場するグエル公園（スペイン）



■グエル公園の椅子は西梅田公園にパクられてまっせ（バルセロナ/スペイン）



■カサ・バトリョの屋上（バルセロナ/スペイン）



■カサ・バトリヨの造形は圧巻(バルセロナ/スペイン)



■幸運にも安く泊まれたホテル・リッツ(バルセロナ/スペイン)



■一応、定番のサグラダ・ファミリアは押さえておこう(バルセロナ/スペイン)



■ピラミッドはデカイけど臭い(カイロ/エジプト)



■ドバイはあまり感動が無かった。上海みたい…(ドバイ)



■ここは一生に一度は行く価値のあるエジプト考古学博物館(カイロ/エジプト)



■世界最大のクリスマス市(ニュルンベルグ/ドイツ)



■香港には「アベニュー・オブ・スターズ」がある



■恩師衣笠元学長のお嬢さんのイタリアンCOVAで(香港)

# The Location Around The World

行ってみたいな名作の舞台へ…

## あとがき

心筋梗塞から奇跡の復活を果たして10年が過ぎた2018年の年末、今度は胃癌を宣告されてしまう。幸い、発見が初期だったお陰で、内視鏡手術で完全に切除することができ、人生において二度目の起死回生を果たすことができた。この時も偶然なのか、何かの導きなのか、健康診断でのX線撮影を何故かこの年だけパスしたけれど、それが後々気になりはじめ、胃カメラを受けることになって、見つかったのだ。X線では見つけることが不可能なタイプの癌だったのだから、まさに結果オーライだったのである。

これは「おい、チーやん(25年前に60歳で先立った親父からは、そう呼ばれていた)、まだやり残したことがあるぞ!」との声なのかもしれない…と、勝手に解釈するようになり、手始めに思いついたのが、2012年にチャレンジしたが、忙しさでついついやり遂げられなかった本書の再編集である。

いざ始めてみると、これが結構大変だった。写真現像(デジタルでもLight Room<暗室>というアプリで調整していく)をし直していくことも手間だが、何よりやっかいなのがページネーション。48回分を4ページずつ割り付けてしまうと膨大になり、そんなブックレット印刷は巷に見当たらない。セレクトしている思い出が蘇ってきたり、どうしても載せたい写真が出てきたり、結局4冊には納まりきらず5冊シリーズになってしまった。なので、Vol.5はパリ、ヴェローナ、コートダジュールに加え、取材・撮影はしたけれど新聞紙面掲載できなかったロケ地や、当時の海外出張・家族旅行の思い出写真も入れ込んで、ようやく5冊に納まった(それでもノルウェーの写真が1枚もないのがおかしいが)。できあがってみると、エラく堂々としたシリーズ写真集の完成だ。

こんなハードな企画はもう、残された人生の中では、まず出来ないかもしれない(…と、一縷の望みを持っていたりして…)。広告を志して40年足らず、独立独歩して20年。「ジイジは、こんなこともやっててんな」と、今はまだ字も読めない孫たちが大人になった時に、読んでもらえれば幸甚。そして、誰かに、「ここ、行ってみたいな…」って思ってもらえれば、こんなに嬉しいことはありません。

最後に、この企画を実現させてもらえた産経新聞社の小田雅弘さん、毎回、新聞紙面を仕上げてくれた真鍋實知子さん、幾度か取材・撮影に付き合ってくれた妻、そして子ども達にも、心の底から…感謝。

松村千秀

2020年6月吉日

All pictures and texts were published on Japanese newspaper article to introduce splendor of each sites. These are not commercial content, but only editorial use, Therefore we never invade a right of personal portrayal, any rights of structures. And this edition is only my private memories. Please accept it.



# The Location Around The World

## volume 5 (Paris/Cannes/Verona/other locations)



All pictures and texts were published on Japanese newspaper article to introduce splendor of each sites. These are not commercial content, but only editorial use, Therefore we never invade a right of personal portrayal, any rights of structures. And this edition is only my private memories. Please accept it.

not for sale